第504回 長野放送番組審議会

1. 開催年月日 令和元年9月4日（水）午前10：30より

2. 開催場所 長野放送本社会議室

3. 委員の出席 ○委員総数 8名
○出席委員数 8名
○出席委員の氏名（敬称略・委員は五十音順）

委員長 林 新一郎

副委員長 渡辺 重久

委員 加藤 恵美子

委員 笹本 正治

委員 佐藤 裕一

委員 武重 正史

委員 田中 宏昌

委員 南澤 光弥

○欠席

なし

○放送事業者側出席者名

外山 衆司 （代表取締役社長）

太田 耕司 （取締役報道制作担当）

飯嶌 憲彦 （取締役編成・業務推進・放送番組審議会担当
業務推進局長）

柳沢 浩之 （編成局長兼放送番組審議会事務局長）

上小牧 忠道 （編成局次長兼編成部長兼視聴者室長）

春原 晴久 （報道制作局長）番組プロデューサー

東澤 鈴美 （制作部）番組ディレクター

4. 議題

(1) 番組審議

『NBSフォーカス∞信州 ブラジル アリアンサに立った信州人』

(令和元年5月24日金曜日午後7:00～7:57放送)

(2) 視聴者対応報告(令和元年7月・8月分)

(3) 番組改善委員会報告

(4) その他

5. 議事概要

(1) 番組審議

- ・ブラジル移民の歴史と長野県との関わりを丁寧に描いた。
- ・地球の裏側で、サンパウロからさらに600km行かないとたどり着けない場所に行くという大変な取材を良く行った。そんな遠いところに、長野県とこれほどまでに深いつながりがある場所があるとは知らなかった。
- ・満蒙開拓団のことは知られているが、ブラジル移民についてはあまり知られておらず、さらに県もそこに深く関わっていたことは初めて知った。良く歴史を掘り起こした内容だった。
- ・タイトルがいい。「アリアンサに“立った”信州人」の、“立つ”という言葉に過去・現在にまたがるいろいろな意味が詰まっている。
- ・日本の“限界集落”と同様に、日系社会が無くなって行ってしまうかもしれないという、現地の日系人コミュニティの危機感が良く描き出されていた。
- ・現地に暮らす日系2世、3世の日本に対する思いを良く拾った。
- ・日本語学校の様子、過去の歴史と現在の生活、大地の自然描写をうまく織り交ぜた。
- ・ブラジルの広い大地、青い空、夕陽に染まった景色など、現地の素晴らしい映像が印象的だった。

- ・世界の中で“信州”を考えさせられる番組。「日本文化とは一体何か？」を逆に考えさせられた。
- ・ブラジルの日系社会の中に古い日本語や昔の日本社会が残っていることが印象的。
- ・異文化に同化していくことがいいことなのか、それともコミュニティを作って自分たちが元々持っているものを大事に守っていくことがいいのかを考えさせられた。
- ・遠いブラジルのアリアンサに日本語教師として派遣された若者が、その開拓の歴史を訪ね歩く構成で、見ごたえのあるいい内容だった。
- ・ブラジル移民の全体像をデータで知りたかった。
- ・初期開拓団としてアリアンサの開拓に深く関わった輪湖俊午郎^{わ こしゅんごろう}、永田 稔^{なが たしげし}、北原 地価造^{きたはら ちかぞう}の3人のことがもっと知りたかった。
- ・移民が国策だったとはいえ、背景にあった貧困や仕事不足など、当時の社会情勢が知りたかった。
- ・先人たちの苦勞した部分をもっと具体的に描いたら、話のドラマ性がもっと強調されたのではないか。
- ・日本語学校に派遣された先生の帰国後の様子を知りたかった。
- ・現地の日本人学校に、長野県から今後も日本語教師を派遣していくのか、その展望が知りたかった。
- ・長野県がアリアンサの地に広大な土地を購入して入植政策を進めたが、そこに国はどのような支援をしたのか、また同様の例がほかにもあるのか知りたかった。

(2) 視聴者対応報告

資料に基づき令和元年7月・8月分の視聴者対応について編成局より報告を行った。